

吉井川の舟運

「山家なれども湯指は名所、津山通いの舟が着く」という湯指小唄にうたわれていたように、中谷の湯指はかつて高瀬舟の舟着き場がありました。

「高瀬舟」とは、船底が平らな小型木造船で、水底が浅く流れのある河川に用いられた舟のことです。徒步や馬での移動が主であった江戸時代以前には、舟を利用した河川交通が人の移動や物資の運搬には欠かせない重要な交通・輸送手段でした。



写真1 湯指の舟着き場跡



写真2 湯指の常夜灯(復元)

吉井川流域の高瀬舟発着場の最上流部としては、『美作略史』に江戸時代初期の万治年間（一六五八～六〇）に、川底をさらえて箱村まで航路を延ばしたという記事がありますが、一時的なものだったようで、湯指が長く吉井川における高瀬舟の最上流部の発着場であったようです。鏡野町域では鳴津（吉原）にも舟着き場がありました。また、高瀬舟は年貢米の輸送や人々の往来だけではなく、物産の往来も行われていました。例えば、津山から備前方面へ下る際には、米・大豆・小豆・綿・木地製品・木炭など

「私たちには高瀬舟を所有していますので、文政二年（一八一九）四月に、備前金岡へ城米の輸送を仰せ付けられ、それを承諾して御用を勤め、藩から錢五〇〇文の褒美と物産品の買い積みを行つております。」

これは、本来津山城下より下流には航行できないはずの城下町上流域の村

江戸時代になると、幕府や藩の政策によって河川交通も整備されていきますが、その最も重要な理由の一つとして、年貢米の輸送があります。各地の村で集められた年貢米は、高瀬舟によって一時津山城下町へ運ばれ、ここからさらに金岡湊（現在の岡山市西大寺付近）を経て海路大阪や江戸の米蔵などへ納入されました。

吉井川流域の高瀬舟発着場の最上流部としては、『美作略史』に江戸時代初期の万治年間（一六五八～六〇）に、川底をさらえて箱村まで航路を延ばしたという記事がありますが、一時的なものだったようで、湯指が長く吉井川における高瀬舟の最上流部の発着場であったようです。鏡野町域では鳴津（吉原）にも舟着き場がありました。また、高瀬舟は年貢米の輸送や人々の往来だけではなく、物産の往来も行われていました。例えば、津山から備前方面へ下る際には、米・大豆・小豆・綿・木地製品・木炭など

「私たちには高瀬舟を所有していますので、文政二年（一八一九）四月に、備前金岡へ城米の輸送を仰せ付けられ、それを承諾して御用を勤め、藩から錢五〇〇文の褒美と物産品の買い積みを行つております。」

これは、本来津山城下より下流には航行できないはずの城下町上流域の村

ど作州の特産物を積み下ろし、その代わりに備前方面から上の際には

塩・魚介類・酒・醤油などの備前の特産品を舟に積み、下りは一日、上りは三日かけて川をさかのぼり往来したようです。

しかし、高瀬舟には所有権や運搬する物資などに関する厳しい制限がありました。鏡野町域では入に番所があり、運搬する産物に対して税を徴収したり、禁制品の取締を行ったりしました。また、「舟株」という権利を所有していなければ舟を持つこともできず、津山城下より上流の高瀬舟は、城下町より下流への航行は禁じられていました。それでも例

外もあつたようで、写真3は、山城村で舟株を所有していたとみられる舟頭・惣右衛門ら五名が文政十年（一八二七）に津山藩へ提出した書状の控えですが、内容をわかりやすく解説すると

この例外の背景は、史料からはわかりませんが、津山藩は文政二年四月から約一年半前に、五万石から一〇万石に加増されたばかりですので、城米の輸送体制がまだ整っていませんでした。

高瀬舟は明治時代も引き続き利用されました。自動車の普及や鉄道の整備によって陸上の大量輸送が可能になると次第に衰退し、昭和初期にその役割を終えました。

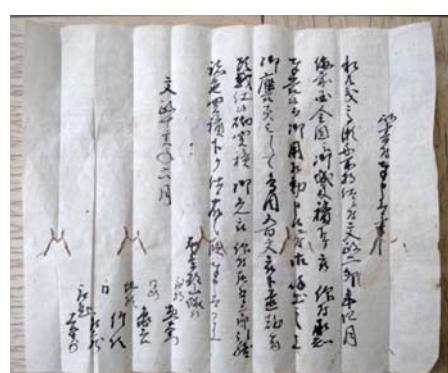


写真3 惣右衛門らの書状(「木村家文書」)

参考資料：『鏡野町史』通史編・史料編・民俗編、『出雲街道』、『鏡野町の文化財』

生涯学習課 口下
電話(0866)54-7733